*Parametopia x-rubrum* Reitter, 1884

日本産オオトゲアリヅカムシ属 (*Lasinus* Sharp, 1874: Coleoptera, Staphylinidae, Pselaphinae) の分類学的ノート

野村周平

国立科学博物館動物研究部 (nomura@kahaku.go.jp)

Systematic notes on the Japanese species of the genus *Lasinus* Sharp, 1874 (Coleoptera, Staphylinidae, Pselaphinae)

Shûhei NOMURA

Abstract The pselaphine genus *Lasinus* Sharp, 1874 (Coleoptera, Staphylinidae) was taxonomically revised by Bekchiev *et al.* (2013). In their paper, three known species were redescribed and eight new species were added. Nine species of them are distributed in Japan but the detail distributions of these species are still poorly known. In the present report, all the Japanese species of *Lasinus* are explained and its detail distribution is documented. Distributional maps of these species and SEM photos of the important characters are also given.

緒言

オオトゲアリヅカムシ属 *Lasinus* は体長約 3 mm の極めて大型のアリヅカムシである。Bekchiev *et al.* (2013) は東アジア産の本属を再検討し、日本産 2 種、ベトナム産 1 種の既知 3 種を再記載するとともに、8 新種を加えて全 11 種とした。このうち 9 種が日本産であり、以下の章で種ごとに解説する。他の 2 種は中国産 (*L. sinicus* Bekchiev *et al.*, 2013) と、ベトナム産 (*L. mandarinus* Raffray, 1890) である。

本属の種は大型であるにもかかわらず種分類が難しく、また Bekchiev *et al.* (2013) は電子ジャーナルで出版されたものであり、容易に一般の目には触れがたいと思われる。そこで和文で本属の新しい種分類の解説を試みるとともに、国内における分布を総括し、過去の記録についても再検討して新たな知見や記録のための基礎を固めておきたい。

本属の発見記載と解明の経緯については、日本人でないことと理解が難しい込み入った事情があり、それが本属の種分類を難しくしている。そのこと

はすなわち、地域のアリヅカムシ相解明についても少なからず障害になるので、顕著な種であるという皮相な見方を排除して、本属の種多様性解明への注意を喚起する意味でも本論文の解説は必要と考えている。

材料と方法

1. 国立科学博物館における本属タイプ標本の所蔵状況

Bekchiev *et al.* (2013) によって新種記載された 8 種 (うち日本産は 7 種) のホロタイプとパラタイプの一部は、現在、つくばの国立科学博物館動物研究部に所蔵されている。また、ヤマオオトゲアリヅカムシ *L. monticola* のタイプ標本も現在、同博物館で保存している。同博物館に所蔵されている本属のタイプ標本の詳細は、以下のとおりである。

L. monticola: ホロタイプ ♂; アロタイプ ♀; パラタイプ 1 ♂

L. mikado: パラタイプ 3 ♂, 6 ♀ (ホロタイプは G.

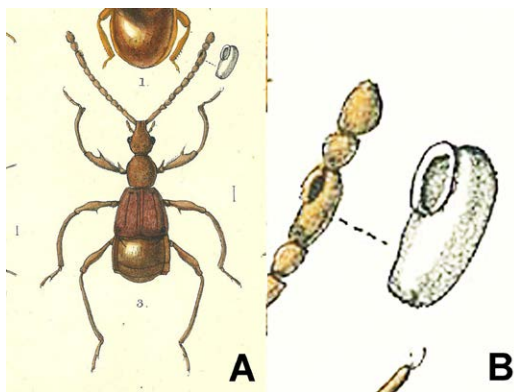


図1. Waterhouse (1882-90)に示されたオオトゲアリヅカムシ *Lasinus spinosus* ♂の図。A: 全形図; B: 右触角の部分図拡大。

Lewis 標本 — ロンドン自博蔵)

- L. yamamotoi*: ホロタイプ ♂; パラタイプ 1♀
L. inexpectatus: ホロタイプ ♂; パラタイプ 1♀
L. yakushimanus: ホロタイプ ♂; パラタイプ 2♂, 5♀
L. amamianus: ホロタイプ ♂; パラタイプ 3♂, 5♀
L. saoriae: ホロタイプ ♂; パラタイプ 3♀
L. okinawanus: ホロタイプ ♂; パラタイプ 3♀

主にこれらの材料に基づいて、以下の解説を行う。

2. SEM写真の撮影方法

走査型電子顕微鏡 (SEM) 写真撮影は、キーエンス社製デジタルマイクロスコープシステム VHX-2000 + VHX-d510 形式の SEM を用い、非蒸着、加速電圧 1.2 kv で行った。

結果

1. オオトゲアリヅカムシ属の日本産種への検索表 (和文)

以下に、Bekchiev *et al.* (2013) に示された本属の種への検索表の和訳を示す。検索表の構成上、ベトナム産の *L. mandarinus* および中国産の *L. sinicus* も含まれている。

1. 前胸背両側の外孔点やや前方に突出部を備える。体長は大きく 3.25–3.60 mm。ベトナムおよび中国産 *L. mandarinus*, *L. sinicus*
- 前胸背両側は均一に丸まるか、外孔点やや前方に弱い膨張がある。体長は小さく 2.70–3.30 mm。日本産 2
2. ♂触角第9節は単純、わずかに先端斜めに切断状 3
- ♂触角第9節は顕著な性的特徴をもつ 4
3. ♂触角第7節は幅の1.3倍の長さ、触角球桿部は



図2. ヤマオトゲアリヅカムシ *L. monticola* のホロタイプ標本。A: 全形図; B: タイプラベル。

図7B参照 *L. inexpectatus*

- ♂触角第7節は幅の1.15倍の長さ、触角球桿部は図7A参照 *L. yamamotoi*
- 4. ♂触角第9節は先端近くに顕著な小突起をもつ 5
- ♂触角第9節の性的特徴は異なる形状 6
- 5. ♂触角第8節は幅の1.16倍の長さ、触角球桿部は図7E参照 *L. amamianus*
- ♂触角第8節は幅の0.9倍の長さ、触角球桿部は図7G参照 *L. saoriae*
- 6. ♂触角第9節は先端に爪状突起を欠く、浅いくぼみを備える 7
- ♂触角第9節は先端に爪状突起を備える 8
- 7. ♂触角第9節はほぼ長方形、触角球桿部は図6A参照 *L. spinosus*
- ♂触角第9節は先端強く内側へ傾斜する、触角球桿部は図7H参照 *L. okinawanus*
- 8. ♂触角第9節先端部に深い凹陷を備える、触角球桿部は図6G参照 *L. mikado*
- ♂触角第9節先端部に浅い凹陷を備える、触角球桿部は図6E, 6D参照 9
- 9. 頭蓋頬部は角ばり、三角形の顕著な突起を有する (Bekchiev *et al.*, 2013) ; 前胸背は外孔点の前方で丸まる; 触角球桿部は図6E参照, ♂交尾器はBekchiev *et al.* (2013) 参照 *L. monticola*
- 頭蓋頬部は角ばらず凸状、弱い突起を有する (Bekchiev *et al.*, 2013) ; 前胸背は外孔点の前方に弱い膨張部を備える; 触角球桿部は図7D参照, ♂交尾器はBekchiev *et al.* (2013) 参照 *L. yakushimanus*

2. 各種の解説

以下に Bekchiev *et al.* (2013) によって記載および再記載された日本産 *Lasinus* 属各種について、記載の経緯、近似種との区別点、雌雄の区別点、分布

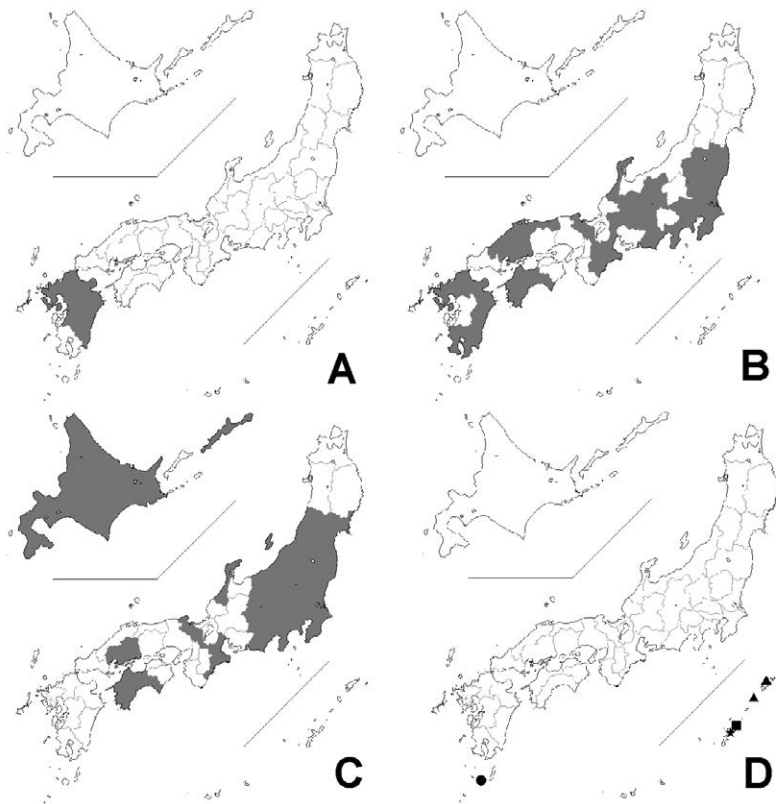


図3. *Lasinus* オオトゲアリヅカムシ属各種の分布図
 1. A: オオトゲアリヅカムシ *L. spinosus*; B: ヤマトオオトゲアリヅカムシ *L. monticola*; C: ミカドオオトゲアリヅカムシ *L. mikado*; D: ヤクオオトゲアリヅカムシ *L. yakushmanus* (●), アマミオオトゲアリヅカムシ *L. amamianus* (▲), サオリオオトゲアリヅカムシ *L. saoriae* (■), およびオキナワオオトゲアリヅカムシ *L. okinawanus* (★).

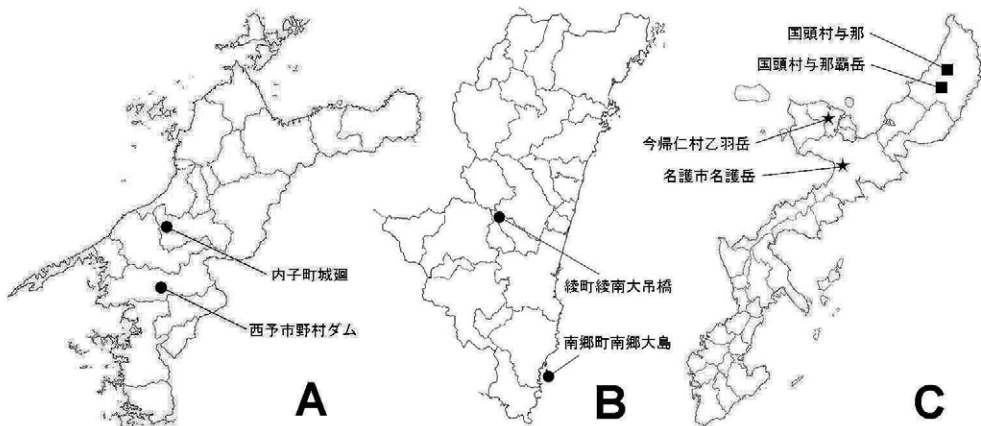


図4. オオトゲアリヅカムシ属 *Lasinus* 各種の分布図2. A: ヤマトオオトゲアリヅカムシ *L. yamamotoi*; B: ナガイオオトゲアリヅカムシ *L. inexpectatus*; C: サオリオオトゲアリヅカムシ *L. saoriae* (■), およびオキナワオオトゲアリヅカムシ *L. okinawanus* (★).

の特徴, タイプ産地 (註1), 既知産地などを記述する. タイプ産地や既知産地については, 行政区分が変更された場合が多くあるが, 以下の文中においては, 発表時の表記を踏襲する. 既知産地の出典については, 初出であるとは限らず, 引用の場合もある. 初出を確かめたい場合には該当の文献を参照されたい. また, 各種の分布図を作成した. この分布図において, *L. spinosus*, *L. monticola*,

註1: 「タイプ産地」とは, 国際動物命名規約 (第4版) によって以下のように定義されている. 「条76. 1. 定義. ある名義種階級群タクソンのタイプ産地とは, その担名タイプを捕獲, 採集, もしくは観察した地理的な (括弧内は無関係なので省略) 場所である. シンタイプがあり, しかもレクトタイプが指定されていないならば, タイプ産地はそれらすべての産地を包含する [条73.2.3]」*L. monticola*はholotype, allotype, paratypesが指定され, それらに属する標本の産地はすべて原記載中に明記されている. この場合規約により, holotype以外のタイプ標本の産地はタイプ産地には該当しない.

L. mikado の3種は、記録地点が多数にわたるため、記録のある都道府県をグレーで塗りつぶすことによって表示した（ただし本土部と各離島は区別し、離島は記録のある島だけを塗りつぶした）。

1) オオトゲアリヅカムシ *Lasinus spinosus* Sharp, 1874

＜記載の経緯＞ 本属のタイプ種であり、長崎から G. Lewis によって採集された。ただ、1874年の論文で書かれた Lewis 標本のデータは、それに続く1883年の論文におけるそれよりも不明確な点が多い。Syntypes とされていた本種のタイプ標本は2点で、ロンドン自博に所蔵されている。2点の一方には赤い縁取りのある丸いラベルが付されており、Bekchiev *et al.* (2013) ではこれを lectotype とし、もう一方を paralectotype とした。2点のいずれにも採集日付は記されていない。Lectotype となった標本の方に“1905-313”というラベルが付されているが、これは後年の Lewis コレクションの登録に関わる整理番号で、他の Lewis 標本にも付されており、採集日付ではない（紛らわしいので要注意）。

原記載の後、Sharp (1883) は、*L. spinosus* の名前で多くの追加個体を記録したが、この中には後に述べる *L. monticola* や、*L. mikado* が含まれており、たとえ *L. spinosus* の表示があつたとしても信用は出来ない。ただし日本産のアリヅカムシを初めて図示した Waterhouse (1882-90) の図説に示された本種は、♂の触角第9節の形状が正しく示されており（図1）、*L. spinosus* であることに間違いない。おそらくはロンドン自博所蔵の syntypes 標本を使って作図したものと思われる。

＜近似種との区別点、雌雄の区別点＞ *Lasinus spinosus* は、♂の触角第9節に性的特徴があり、これによって他種と区別することができる。♂の第9節はやや細長く、先端部上面やや内側にタコ状の幅広い突起があり、突起の上面は斜めに切り落とされたような滑面となる。走査型電子顕微鏡で観察するとその部分には、突起内側に短い感覚毛を備えている（図6A）。

本種における雌雄の差異は顕著で、♂は触角第9節の他に、その基方に位置する第8節も太くなり、触角第8～11節で球桿部を形成する（図6A）。また、中脚転節に1本のトゲをもち（♀では2本）、中脚基節のすぐ後方（後胸腹板前方部）に、一対の鈍い突起を有する。一方♀は触角第9～11節が球桿部を形成し（図6B）、その他の外形的な特徴には乏しい。触角第7、8節のそれぞれは太短く、この特徴によって *L. monticola* からはかろうじて区別することができる。しかし同様の特徴を持つ *L.*

mikado とは、♀同士での区別はできない。

＜分布の特徴＞ 本種の分布域は図3aに示した。これまでに *L. monticola* や *L. mikado* を含む多数の標本を検しているが、*L. spinosus* は九州本土のみに産し、それ以外の標本を見たことがない。九州本土では比較的普通種であるが、*L. monticola* と混棲することが多いので、なるべく多くの標本を確保して詳しく調べる必要がある。宮崎県では後に述べる *L. inexpectatus* と混棲している可能性があり、注意が必要である。

＜タイプ産地＞ 長崎 (Sharp, 1874)

＜Bekchiev *et al.*, 2013 で示された産地＞ [福岡県] 英彦山 [佐賀県] 鹿島市経ヶ岳 [長崎県] 長崎市諏訪神社、諫早市城山愛宕山 [熊本県] 植木町 [大分県] 庄内町西大原、九重町牧ノ戸峠 [宮崎県] 田野町青井岳、清武町加江田溪谷、綾町綾南。

＜その他の既知産地＞ [佐賀県] 鹿島市経ヶ岳(野村, 1996a, b)、鹿島市蟻尾山(野村, 2002b) [長崎県] 五島中通島丹那山、長崎市諏訪神社(野村, 1990) [大分県] 直川村横川(佐々木, 1990) 国見町長瀬(野村・三宅, 2009) [宮崎県] 宮崎市加江田溪谷、平和台、田野町鰐塚山、青井岳、綾町綾南、川中(野村, 1995a, b—註2) 宮崎市加江田溪谷、須木村柚園、日南市鶴戸、串間市都井岬(野村・永井, 1995)

2) ヤマオオトゲアリヅカムシ *Lasinus monticola* Sawada, 1961

＜記載の経緯＞ Sawada (1961) により、九州英彦山から記載された。タイプ標本は Bekchiev *et al.* (2013) では検討されていない。しかしこれらは長年にわたって、澤田高平博士が極めてよい状態でご自宅に保管されていた。2014年9月、筆者が澤田博士宅を訪問して、本タイプ標本を譲り受け、現在は国立科学博物館のアリヅカムシコレクション中に保存されている。本タイプ標本とタイプラベルの写真を図2に示す。

＜近似種との区別点、雌雄の区別点＞ 本種の外形は雌雄ともに *L. spinosus* によく似ており、典型的な隠蔽種といってもいいくらいである。雌雄の区別点は *L. spinosus* の場合と同じである。ただし多くの個体を見ると個体変異があつて、なかなか決定しづらい場合もある。図5はいくつか雌雄の区別点とされているものを SEM 写真に撮影して、左右に配置したものである（左：♂；右：♀）。A～F は撮影に

註2：野村 (2002b) によって示された佐賀県の産地「多久市西多久町池」は、その後の検討により当時の行政区画では東松浦郡相知町に属し、その後唐津市相知町と変更になったことが野村 (2010) により示されている。

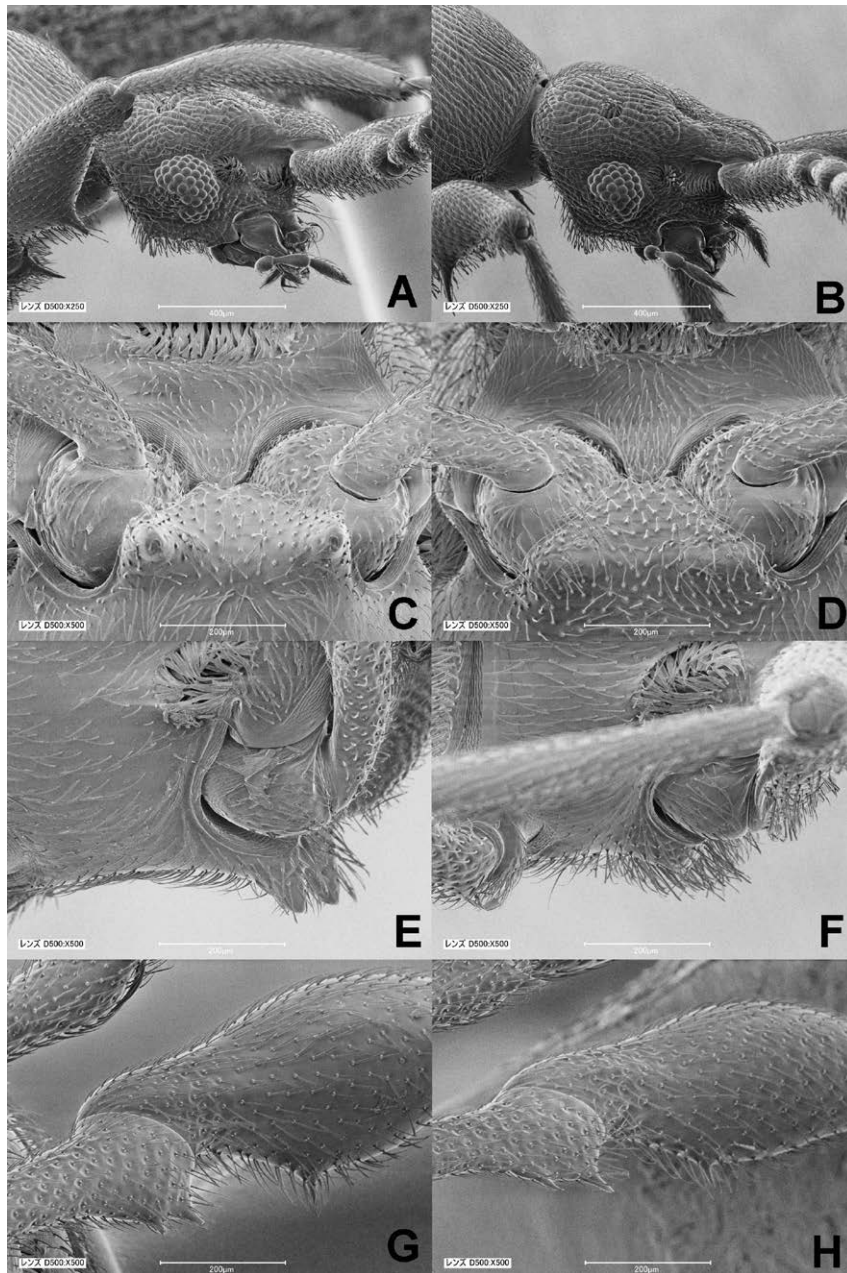


図5. ヤマオトゲアリゾカムシ *Lasinus monticola* における雌雄の区別点。A, C, E, G, ♂; B, D, F, H, ♀; A, B: 頭部側面; C, D: 後胸部前端腹面; E, F: 同左, 側面; 中脚転節。

用いた個体でも明らかに雌雄が区別できる。しかし図 5G, H に示した中脚転節後方の棘状突起は、通常♂が1本、♀が2本とされているが、SEM 観察した雌雄ではどちらも2本で区別が難しい。

♂同士で *L. spinosus* と比較した場合、触角第9節上面には性的特徴がなく(図 6C)、下面に♂では爪形の突起を有する(図 6E)。 *Lasinus spinosus* 同様、♂の後胸腹板前縁に一对の隆起を有するが、

その突出程度は *L. spinosus* におけるよりも著しい(図 5C, E)。以上の区別点は *L. spinosus* だけではなく、*L. mikado* に対しても有効である。♀同士の比較では、*L. spinosus* の項に記したように、触角第7, 8節のそれぞれが細長い長卵形である点で近似2種と区別できる(図 6D, F)。

<分布の特徴> 本種の分布域は図 3B に示した。本種は本州~九州本土の広い地域に普通に産

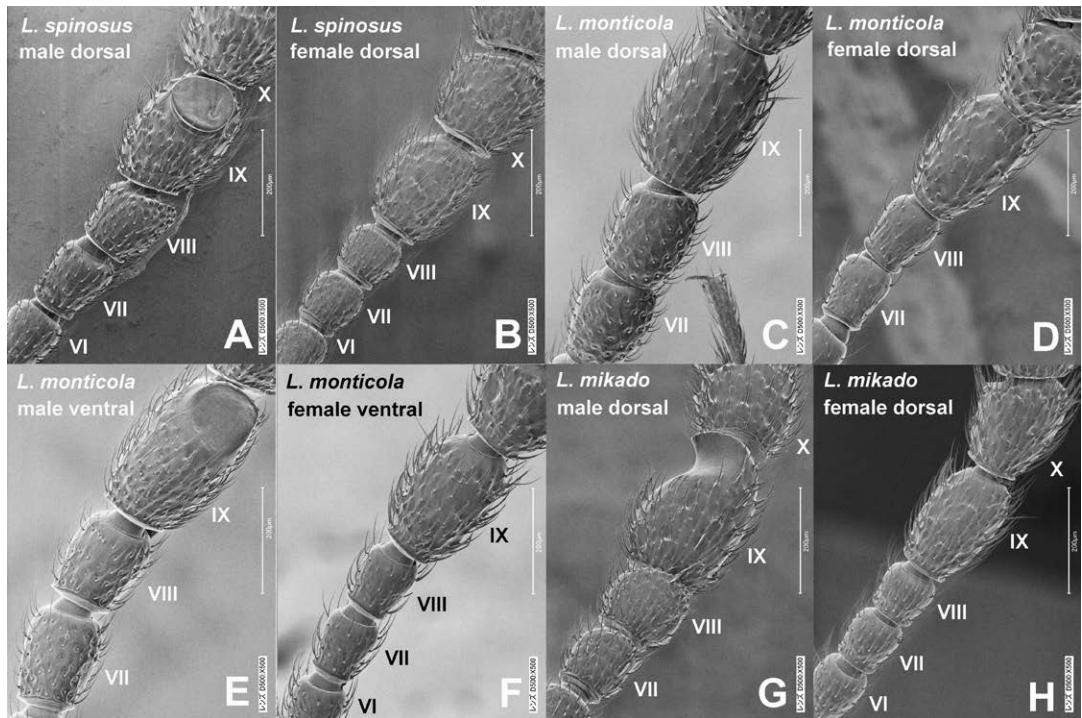


図6. *Lasinus*各種の触角第9節付近の微細構造1. A: *L. spinosus* ♂背面; B: 同♀; C: *L. monticola* ♂背面; D: 同♀; E: 同♂腹面; F: 同♀; G: *L. mikado* ♂背面; H: 同♀.

し、本州、四国では *L. mikado* と、九州本土では *L. spinosus* と分布が重なっている。本州の多くの地域では非常に普通に生息しているが、なぜか新潟県を中心とした北陸地方からは記録がない。

<タイプ産地> 英彦山(福岡県)(Sawada, 1961)

< Bekchiev *et al.*, 2013 で示された産地 > [福島県] 会津奥只見浅草岳 [東京都] 福生市多摩川睦橋, 奥多摩町日原小川谷 [神奈川県] 箱根宮ノ下 (G. Lewis 標本), 愛川町八菅山 [京都府]「京都」[奈良県] 奈良公園 [鳥根県] 金木町後山 [愛媛県] 小田町小田深山, 成川溪谷, [長崎県] 雲仙絹笠山 [宮崎県] 都農町尾鈴山, 高千穂町鬼の岩屋, 鱈塚山, 綾町 [鹿児島県] 霧島栗野岳, 始良町, 大隅甫与志岳。

<その他の既知産地> [福島県] いわき市江田(三和町)(野村・田添, 1999) [茨城県] 水戸市岩根 (Nomura, 1996) [栃木県] 足尾町唐風呂林道ゲート, 粟野町上粕尾粕尾峠南, 足利市上名草町名草巨石群西 (野村, 2002a) [埼玉県] 両神村両神山タチャ掘 (新井, 2001) [千葉県] 清澄山 (山崎, 1999) [東京都] 奥多摩町日原小川谷, 倉沢, あきる野市上養沢, 檜原町本宿 (亀澤・野村, 2012) [神奈川県] 座間市谷戸山, 芹沢, 伊勢原市大山, 箱根町大涌谷, 湖尻 (平野, 2004) [静岡県] 藤枝市蔵田 (原木ほか, 2008) [長野県] “Yatsu” (ハケ岳?)

(Sawada, 1961), 松本市浅間温泉, 扉一入山辺, 岡田神社 (野村・降旗, 1998), 天龍村伊那小沢 (降旗・野村, 2008) [岐阜県] 白川村, 上宝村平湯, 七宗町 (野村・鈴木, 1993) [石川県] 白山禅定道, 白峰六万山, 鶴来後高山, 押水宝達山 (高羽ほか, 1998) [三重県] 尾鷲市三木崎, 九木崎, 美杉村平倉 (野村・秋田, 2007), 菟野町田口, 雲母峰, 青山町阿保, 上野市諏訪, 伊勢市剣峠, 南島町藤坂峠, 古和浦, 美杉村平倉, 宮川村総門山, 迷岳, 紀伊長島町三戸第一発電所, 三浦高塚公園, 高塚公園, 豊浦神社, 尾鷲市桃頭島, ナサ崎, 須賀利, 三木崎, 九木崎, 熊野市楯ヶ崎 (野村・横関, 2007) [京都府] “Kioto” (野村, 2001), 瑞穂町水呑, 京都市左京区貴船, 鞍馬山, 花脊峠, 大悲山, 伏見区醍醐山, 保津峡, 大原, 宇治市仏徳山, 東笠取, 炭山, 五雲峰, 天ヶ瀬, 宇治田原町鷺峰山, 和束町鷺峰山, 笠置町笠置山 (野村・水野, 2002) [奈良県] 長谷 (Sawada, 1961) [鳥取県] 大山 (Sawada, 1961) [広島県] 吉和村中津谷, 三段峡, 芸北町八幡原, 呉市灰ヶ峰, 福富町クロボヤ峡, 鷹ノ巣山, 厳島, 庄原市七塚原 (岡本・野村, 1987), 高野町 (岡本・野村, 1988) [鳥根県] 赤来町草の城山, 上来島, 日原町奥谷安蔵寺山 (野村・福井, 2004) [愛媛県] 小田町小田深山生草谷, 溪谷, 柵小屋, 小屋山, 本谷,

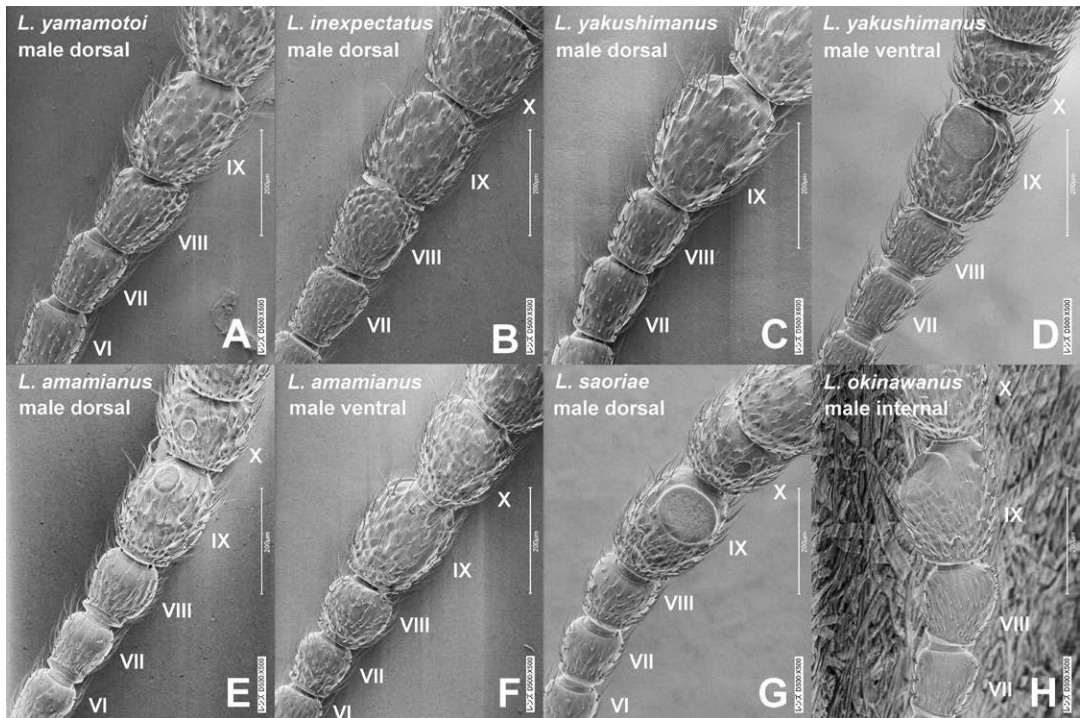


図7. *Lasinus*各種の触角第9節付近の微細構造2. A: *L. yamamotoi* ♂背面; B: *L. inexpectatus* ♂背面; C: *L. yakushimanus* ♂背面; D: 同腹面; E: *L. amamianus* ♂背面; F: 同腹面; G: *L. saoriae* ♂背面; H: *L. okinawanus* ホロタイプ♂背面やや内面.

小田町, 内子町御調神社 (野村・山本, 2000) [高知県] 物部村別府溪谷, 本山町早稲田 (野村・宮田・宮田, 2006) [佐賀県] 相知町黒岩, 太良町多良岳, 鹿島市柿原一経ヶ岳, 奥平谷, 経ヶ岳, 脊振村脊振山, 佐賀市金立山, 鳥栖市石谷山 (野村, 1996a, b), 多久市西多久町池 (註2), 鹿島市祐徳稲荷神社, 蟻尾山, 太良町経ヶ岳, 嬉野町虚空蔵山 (野村, 2002b) [長崎県] 平戸市古江道, 五島中通島丹那山, 西彼杵郡長与町, 長崎市諏訪神社, 片瀬町, 湯江町轟峡 (野村, 1990), 小浜町白雲池, 大村市狸の尾 (野村, 1995c), 西海町虚空蔵山, 大瀬戸町雪ノ浦, 白樫, 外海町岩背戸溪谷 (野村・松尾, 2001) [大分県] 緒方町傾山, 野津町, 庄内町黒岳 (佐々木, 1990) 佐伯市轟峠 (野村・三宅, 2008) 大分市小野鶴, 玖珠市日出生台 (野村・三宅, 2009) [宮崎県] 高原町御池, 都農町尾鈴山, 北川町大崩山, 綾町綾南, 川中 (野村, 1995a, b) 日之影町内の口, 北川町大崩山, 小林市金山, えびの市尾八重演習地 (野村・永井, 1995) [鹿児島] “Takachiho” (高千穂峰?) (Sawada, 1961)

3) ミカドオオトゲアリヅカムシ (和名新称) *Lasinus mikado* Bekchiev, Hlaváč et S. Nomura, 2013

<記載の経緯> Bekchiev et al. (2013) によって新

種として記載された. 本種は皇居からも確認されており, それにちなんで筆者が新種名“*mikado*”を第一著者に提案し, 受け入れられた. しかし本論文以前にも本種は未記載種として長い間知られていたもので, 多くのリストに“*Lasinus* sp.”または“*Lasinus* sp. 1”という名称で発表されている.

本種のホロタイプ標本はロンドン自然博所蔵の G. Lewis 標本であり, 箱根宮ノ下から採集されたものである. Bekchiev et al. (2013) には, 以下のような説明がある. 「Sharp コレクション中の *L. spinosus* のタイプシリーズは, 実際のところ, *L. spinosus* と *L. mikado* の混合である.」しかし筆者の現在の見解ではこの説明は必ずしも正確ではない. 1874年に記載された *L. spinosus* のタイプ標本 (syntypes) は2点で, これらは両方とも *L. spinosus* そのものであった. これら2点のみがタイプシリーズであって, それより後の標本はタイプではない. しかし1881年に再度日本のアリヅカムシが多く記載された際 (Sharp, 1881), オオトゲ属の標本はすべて *L. spinosus* として, タイプシリーズと区別されることなくロンドン自然博に所蔵された. この集団が *L. spinosus* と *L. mikado* (あるいは *L. monticola* も?) の混合ということである.

<近似種との区別点, 雌雄の区別点> 本種は,

L. spinosus と *L. monticola* の双方に近似するが、分布上 *L. spinosus* と代置関係にあり、*L. monticola* とはかなりの部分で分布が重複している。本種と *L. monticola* は、♂ の性的特徴が触角第 9 節先端部の上面 (*L. monticola* では下面) に現れる点で区別できる。♂ の触角第 9 節は先端部上面が深くえぐられることで、*L. spinosus* とは区別される (図 6G)。一方 ♀ 同士の比較においては、*L. monticola* とは、*L. monticola* の項で記述した点によって区別されるが、*L. spinosus* と ♀ 個体だけで形態的に区別することは不可能である (図 6H)。

<分布の特徴>本種の分布域は図 3C に示した。千島国後島、北海道、本州、四国に産し、多くの地域で普通である。とくに本州では非常に普遍的に分布し、前種の少ない越後、北陸地方にも普通に生息している。九州本土には産しないので、*L. spinosus* と混同されることは少ない。九州以外では、<その他の既知産地>の項に示したとおり、多くの地域から、*L. spinosus* として記録されており、これらは *L. mikado* に訂正されなければならない。

<タイプ産地> 宮ノ下 (神奈川県箱根—G. Lewis 標本) (Bekchiev *et al.*, 2013)

< Bekchiev *et al.*, 2013 で示された産地 > [国後島] Tretiakovo VIII [北海道] 天塩町天塩川、島牧村大平 [宮城県] 秋保町二口峡 [群馬県] 新治村法師温泉 [埼玉県] 嵐山町加賀又 [千葉県] 神崎町神崎神社 [東京都] 千代田区皇居吹上御苑、福生市多摩川落合橋 [神奈川県] 「神奈川」(Sauter 標本) [新潟県] 新発田市黒岩 [広島県] 庄原市七塚原 [愛媛県] 石鎚山面河溪 [その他] 「日本」

<その他の既知産地> [山形県] 戸沢村角川、尾花沢市市野々、遊佐町岩野、杉沢、天狗森、松山町東山林道、下新田河原、真室川町高坂林道、酒田市泉谷池、鶴岡市高館山、温海町摩耶山関川、羽黒町月山 2~4 合目、羽黒山、飯豊町中村観音下 (以上 *L. spinosus* として、野村・櫻井, 1998) [福島県] 飯館村二枚橋、西郷村鶴生高助、福島市渡利古峯山、弁天山、十万劫山、黒岩、赤岩、いわき市江田、背戸岨廊、相馬市中井塚、飯館村、助常林道 (以上 *L. spinosus* として、野村・田添, 1999)、下郷町沼山湿原、中山風穴 (*L. sp. 1* として、野村, 2004) [茨城県] 大子町月居山 (*L. spinosus* として、Nomura, 1996) [栃木県] 那須町豆沢、塩屋町佐貫観音橋、馬頭町鷲子山 (*L. sp. 1* として、野村, 2002a) [群馬県] 吾妻村吾妻新巻 (*L. sp. 1* として、野村・渡辺, 2009) [埼玉県] 児玉町十二天池、寄居町鐘撞堂山、三ヶ山 (以上 *L. spinosus* として、野村・南部, 1996) 日高市日和田山、小

鹿野町森宿、小川町木呂戸、腰越、鞆負、越生町、江南町小江川、嵐山町菅谷、吉田 (滑川)、吉田、大蔵 (都幾川)、川越市落合橋 (入間川)、毛呂山町獅子ヶ滝、児玉町滝の前 (以上 *L. sp.* として、新井, 2001) [千葉県] 我孫子市、清澄山 (以上 *L. spinosus* として、山崎, 1999) [東京都] 千代田区皇居、町田市相原町大地沢、図師町、あきる野市小川 (多摩川河川敷) (以上 *L. sp.* として、亀澤・野村, 2012) [神奈川県] 横浜市栄区上郷町、円海山瀬上地区、峰地区、相模原市上溝、綾瀬市早川、愛川町梅沢、厚木市荻野、伊勢原市大山、藤沢市川名、大磯、城山町、津久井町根小屋~青山、三ヶ木、鳥屋、山北町西沢、秦野市菩提、大倉、清川町宮ヶ瀬、南足柄市大雄山、小田原、箱根町木賀、湖尻 (平野, 2004—註 3) [静岡県] 焼津市坂本、磐田市鶴ヶ池 (以上 *L. sp. 1* として、原木ほか, 2008) [山梨県] 明野村 (*L. sp. 1* として、原木ほか, 2008) [長野県] 松本市浅間温泉、伊深 (以上 *L. spinosus* として、野村・降旗, 1998)、小谷村小谷温泉、大綱、穂高町牧、阿智村昼神、白馬村ガクモヶ原、佐野坂、高山村雷滝 (以上 *L. sp. 1* として、降旗・野村, 2008) [新潟県] 羽茂町、山北町勝木、関川村片貝、村上市早川、岩ヶ崎、岩船、黒川村黒川、豊浦町月岡、弥彦山、村松町大沢、五泉市咲花温泉、柏崎市上輪、能生町能生、山北町荒川、下田村吉ヶ平、小木町小比叡、村上市大栗田、新発田市上石川、蔵谷、上赤谷、新保小路、黒岩、菅谷、下石川舞台、下石川、長峰原、金屋、板山、焼峰山、中条町笹口浜 (以上 *L. spinosus* として、野村・小池, 1994) [石川県] 白山禅定道、鶴来後高山 (以上 *L. spinosus* として、高羽ほか, 1998) [三重県] 尾鷲市三木崎、久居市戸木敏太神社 (25 m)、員弁町市之原、美杉村平倉、青山町西青山 (以上 *L. sp. 1* として、野村・秋田, 2007)、藤原町藤原岳、大安町竜ヶ岳、菟野町田口、雲母峰、四日市市宮妻峽、関町観音山、阿山町神山、岩尾山、上野市外山、諏訪、島ヶ原村三国林道奥村、白山町四季の里、松阪市大阿坂町阿射加神社、飯高町蓮ダム、美杉村平倉、伊勢寺町瑞巖寺、南勢町押淵、大宮町古屋、尾鷲市九木崎、熊野市桶ヶ崎 (以上 *L. sp. 1* として、野村・横関, 2007) [京都府] 瑞穂町大朴、大久保北山、左京区鞍馬山、八幡市男山、宇治市仏徳山、天ヶ瀬、宇治田原町鷲峰山、和束町鷲峰山、笠置町笠置山、

註 3: 平野 (2004) は、本種を未記載種と認めたくて、和名を「ニセオトゲアリツカムシ (仮称)」とした。しかし今回、正式に学名が命名されたことを契機に、和名もそれにふさわしいものを与えるべきと考えた。それで日本甲虫学会第 4 回大会 (東京農大厚木 2013) の席上、平野氏と協議したうえで、本種の和名を標記のようにすることで合意した。

精華町祝園(野村・水野, 2002) [広島県] 呉市灰ヶ峰 (*L. spinosus* として, 岡本・野村, 1987), 庄原市七塚原, 呉市二級峽, 黒瀬町, 高野町 (以上 *L. spinosus* として, 岡本・野村, 1988) [高知県] 土佐清水市柳駄馬, 東津野村天狗高原 (以上 *L. sp. 1* として, 野村・宮田・宮田, 2006)

4) ヤマトオトゲアリヅカムシ (和名新称)

Lasinus yamamotoi Bekchiev, Hlaváč et S. Nomura, 2013

<記載の経緯> 愛媛県小田町在住の山本栄治氏から寄贈された愛媛県内産の標本中から筆者が発見し, Bekchiev らによって記載されたものである。本種の新種小名は山本氏に献名された。本種は山麓の低山地から発見されている。

<近似種との区別点, 雌雄の区別点> 本種は本属内の近似種からの区別がとりわけ難しい種である。♂の触角第9節先端部には上面下面ともに性的特徴を示す突起や凹陷は認められない(図7A)。その点が唯一, 日本本土産の普通種3種との相違点である。しかしその点では次種の *L. inexpectatus* と共通する。♂交尾器の形状は *L. spinosus* に酷似し, *L. inexpectatus* とは明確に異なる。雌雄の区別点は他の種と同様である。ただし♀単独では, *L. spinosus*, *L. mikado*, *L. inexpectatus* とは全く区別することができない。

<分布の特徴> 本種の確認地点は図4Aに示した。愛媛県南部からのみ発見されている。

<タイプ産地> 愛媛県西予市野村町野村ダム

<Bekchiev et al., 2013で示された産地> [愛媛県] 野村ダム, 内子町城廻(後者の産地は野村・山本, 2000によって, *L. sp. 1* としてすでに発表されている)。

5) ナガイオトゲアリヅカムシ (和名新称)

Lasinus inexpectatus Bekchiev, Hlaváč et S. Nomura, 2013

<記載の経緯> 筆者所蔵の宮崎県産標本の中から発見され, このたび記載された。野村(1995a)が宮崎県産アリヅカムシをまとめた際には, すでに採集されていたにもかかわらず, *L. spinosus* と区別されておらず, 「オトゲ」として記録されていた(註4参照)。新名の“*inexpectatus*”は「予想されていなかった」の意味である。パラタイプの一つは, 宮崎県在住の永井あつし氏が採集し, 筆者に提供されたものである。諸般の事情により学名を献名することはできなかったが, 和名を献呈して長年のご厚誼に感謝したい。

<近似種との区別点, 雌雄の区別点> 本種もま

た前種と同様, 同属他種との区別がきわめて難しい種である。♂の触角第9節には, 前種同様の性的特徴は現れない(図7B)。本種はまた, 前種とも酷似しており, ♂交尾器の比較以外には区別点は全く見つかっていない。♂交尾器は, 内部骨片の形状は *L. yamamotoi* のそれに非常に類似しているが, 中央片先端の傾斜部の長さが, *L. yamamotoi* に比べてずっと短い。♀は特徴に乏しく, 前種同様♀単独では近似他種と形態的に区別することができない。

<分布の特徴> 宮崎県内のみから発見されている。本種の確認地点は図4Bに示した通りである。産地は特に山間僻地ではなく, 宮崎県南部海岸部およびそこからあまり遠くない山麓部である。

<タイプ産地> 宮崎県綾町大吊橋。

<Bekchiev et al., 2013で示された産地> [宮崎県] 綾町大吊橋, 南郷町南郷大島。

6) ヤクオオトゲアリヅカムシ (和名新称) *Lasinus yakushmanus* Bekchiev, Hlaváč et S. Nomura, 2013

<記載の経緯> Bekchiev et al., 2013によって記載された。タイプ標本は8♂, 7♀である。それ以前に記録が発表された例はない。

<近似種との区別点, 雌雄の区別点> ♂の触角第9節の性的特徴は *L. monticola* にもっともよく類似し, 爪状突起を腹面先端部に有する(図7C, D)。しかし本種では, 1) 頭部後側方が角ばらず丸まる(*L. monticola* では角ばる), 2) 前胸部は背面から見た場合に前方で, 側方へ向かってやや突出する(*L. monticola* では全く突出しない)などの点で区別できる。雄交尾器は内部骨片の形状が *L. monticola* と顕著に異なる。

<分布の特徴> 鹿児島県屋久島のみ分布する。本種の分布域は図4Dに示した。同属他種と分布の重複はない。

<タイプ産地> 鹿児島県屋久島花之江河

<Bekchiev et al., 2013で示された産地> [鹿児島県] 屋久島花之江河, 同ノンキ岳, 同愛子岳

7) アマミオトゲアリヅカムシ (和名新称)

Lasinus amamianus Bekchiev, Hlaváč et S. Nomura, 2013

<記載の経緯> 筆者採集の標本(11♂, 9♀)をも

註4: 野村(1995a, b)および野村・永井(1995)によって, 宮崎県内各地から, *L. spinosus* および *L. monticola* が記録されたが, この当時筆者は *L. inexpectatus* の存在を認識しておらず, *L. spinosus* の記録中に *L. inexpectatus* が紛れ込んでいる可能性が否定できない。

とに記載された。

〈近似種との区別点, 雌雄の区別点〉本種は南西諸島産の他の3種とよく類似しているが, ♂の触角第9節に突起をもつ(図7E, F)点で, 沖縄産の *L. saoriae* とともに, 他の2種から区別される(他の2種では顕著な突起はない)。 *Lasinus saoriae* とは雄交尾器の形状によって区別できる。本種の雄交尾器中央片の先端は, 奄美大島以北に産する他の種と同様に, 右側(上下転倒したり, 背腹逆転すると左右逆転するので注意)が長く, 左側が短い斜め切断状である。

〈分布の特徴〉奄美大島, 徳之島に産する。本種の分布域は図4Dに示した。

〈タイプ産地〉奄美大島油井岳。

〈Bekchiev *et al.*, 2013で示された産地〉[奄美大島]油井岳 [徳之島]犬田布岳, 与名間。

8) サオリオトゲアリヅカムシ (和名新称) *Lasinus saoriae* Bekchiev, Hlaváč et S. Nomura, 2013

〈記載の経緯〉筆者採集の沖縄島北部産の標本(6♂, 6♀)をもとに記載された。種小名が献呈された「タケウチサオリ」氏は, 本種記載論文の第一著者R. Bekchiev氏(ブルガリア人)の友人であるが, 筆者は面識がない。

〈近似種との区別点, 雌雄の区別点〉本種は前種 *L. amamianus* と同様, ♂の触角第9節先端部に弱い突出部を備える(図7G)。分布の隣接する次種 *L. okinawanus* との区別は, 非常に軽微で難しく, 次種の項で示す。

〈分布の特徴〉タイプ標本はすべて沖縄島北部国頭村内で採集されている。本種の確認地点は図4Cに示した。分布域の近接する次種とは, 分布域が一部で重複するのか, それともきれいにすみ分けているのか, 細部までは詰められていない。

〈タイプ産地〉沖縄県国頭村与那覇岳。

〈Bekchiev *et al.*, 2013で示された産地〉[沖縄島]国頭村与那覇岳, 与那, 「国頭」。

9) オキナワオトゲアリヅカムシ (和名新称) *Lasinus okinawanus* Bekchiev, Hlaváč et S. Nomura, 2013

〈記載の経緯〉筆者の採集標本(4♂, 4♀)をもとに記載された。

〈近似種との区別点, 雌雄の区別点〉Bekchiev *et al.* (2013)は, 「本種は♂触角第9節に明確な突起をもたず, 浅い凹陷のみを備えるとして, 明瞭な突起をもつ *L. amamianus* および *L. saoriae* と区別できる」としている(本章第1項検索表も参照)。

しかし, 図7HのSEM写真を見ると, 浅い凹陷とされたものは, 前種 *L. saoriae* と同様な楕円形の背の低い突起である。したがって同様の突起を備える *L. spinosus* と近似である点は間違いないが, より分布域の近接した前種との区別が重要となる。すなわち本種は, 前種と以下のような共通の特徴を持つ: ♂触角第9節は先端部に, 大きな円盤状の背の低い突起を有する。突起の頂部は斜めに切断状となり, ほぼ平面であるが, 中央部はわずかにくぼむ。しかし♂交尾器の形状はBekchiev *et al.* (2013)の原記載論文に図示されている通り, 両種でかなり異なっており, 以下のような相違点で区別される。♂交尾器内部骨片(endophallus)は, 背腹方向に重なる3枚の板状骨片からなる。これら3枚は, 短くて先端切断状の1枚と, 長くて先端鋭く突出する2枚からなる。長い骨片2枚の片方は幅広で, 片方は基部から先端まで終始細い。本種 *L. okinawanus* では, 幅広の骨片は先端近くで大きく広がり, 交尾器の右側へ大きく張り出す。前種 *L. saoriae* では, 同じ骨片があまり広がらず細い方の骨片の幅の2倍程度である。以上の区別点十分に種間の分類形質として有効であるか否かについて, Bekchiev *et al.* (2013)の段階では, 検視個体数および産地数が十分ではないと筆者は考えており, 両種が種または亜種のレベルで互いに独立であるのか, 今後の更なる検討が必要である。

〈分布の特徴〉タイプ標本は沖縄島北部の名護市および本部半島から採集されたものである。本種の確認地点は図4Cに示した。 *Lasinus saoriae* の分布域と近接するが, 両種の分布域が離れているのか, 接しているのか, はたまた重複しているのか, 追加記録を待たなければならない。

〈タイプ産地〉沖縄県今帰仁村乙羽岳。

〈Bekchiev *et al.*, 2013で示された産地〉[沖縄島]今帰仁村乙羽岳(本部半島), 名護市名護岳。

考察

Bekchiev *et al.* (2013)によって, 日本産オオトゲアリヅカムシ属は9種が産することが明らかにされたが, それらは, 日本本土に普通に産する3種, すなわち1)オオトゲ *L. spinosus*, 2)ヤマオオトゲ *L. monticola*, 3)ミカドオオトゲ *L. mikado*, 分布域がきわめて限定される稀産の2種, 4)ヤマモトオオトゲ *L. yamamotoi*, 5)ナガイオオトゲ *L. inexpectatus*, 南西諸島に産する4種, 6)ヤクオオトゲ *L. yakushmanus*, 7)アマミオオトゲ *L. amamianus*, 8)サオリオオトゲ *L. saoriae*, 9)オキナワオオトゲ *L. okinawanus*, である。

1), 2), 3) は同所的に産する場合もあるが, ♂ 触角第9節の, それぞれ独自の形状によって区別される。4), 5) は, ♂ でも触角第9節に明瞭な性的特徴を有さないことで, 1), 2), 3) とは区別できるが, 分布域が重複する場合もあり, ♀ 個体のみでは種の識別は不可能である。

オオトゲアリヅカムシ属各種の分布の解明はまったく充分ではない。特に以下に示す地域での分布記録の充実を図りたい。

L. spinosus : 鹿児島。

L. monticola : 新潟以北, 富山, 群馬, 山梨, 愛知, 福井, 滋賀, 兵庫, 大阪, 和歌山, 岡山, 山口, 香川, 徳島, 熊本, 九州島嶼。

L. mikado : 青森, 秋田, 岩手, 茨城, 富山, 岐阜, 愛知, 福井, 滋賀, 兵庫, 大阪, 奈良, 和歌山, 広島以外中国地方, 香川, 徳島。

以下の種についても分布記録は不十分であり, 更なる産地記録の追加が望まれる。

L. yamamotoi : 愛媛, 高知?

L. inexpectatus : 宮崎, 熊本?, 鹿児島?

L. saoriae : 沖縄島国頭地域

L. okinawanus : 沖縄島北部, 本部半島

日本列島の中で多様に種分化するに至った本属が, どのような進化経路を経てきたのかについては, 今後の研究テーマとして大いに興味が持たれる。

謝辞

本研究につき, 科博における多数のタイプ標本の所蔵にご協力いただいた, 澤田高平博士(高槻市), Rostislav Bekchiev 氏 (Bulgaria, Sofia) ならびに, Peter Hlaváč 氏 (Czech, Praha) に厚く御礼申し上げる。また, 日本国内における本属標本の収集にご協力くださったたくさんの方々に, この場を借りて心より感謝の意を表したい。さらに過去の本属の記録についてご指摘をいただいた茨城県の金子道夫氏にも特に感謝申し上げる。本研究の一部は科研費新学術領域「生物規範工学」の計画研究「バイオミメティクス・データベース構築」(課題番号: 24120002; 代表者: 野村周平) および JST 受託研究費「階層的に構造化されたバイオミメティック・ナノ表面創製技術の開発」の助成を受けている。

引用文献

新井志保, 2001. 埼玉県のアリヅカムシ相. 埼玉県立自然史博物館研究報告, (19): 1-14.
Bekchiev, R., P. Hlaváč and S. Nomura, 2013. A taxonomic revision of Tyrini of the Oriental region. V. Revision of the genus *Lasinus* Sharp, 1874 (Coleoptera, Staphylinidae, Pselaphinae). *Zookeys*, 340: 21-42 (doi: 10.3897/zookeys 340.5980).

江島正郎, 1985. アリヅカムシの灯火飛来例. 月刊むし, (178): 13-14.
原木直美・田添京二・野村周平, 2008. 静岡県内及びその周辺で採集したアリヅカムシ. 甲虫ニュース, (161): 1-8.
平野幸彦, 2004. コウチュウ目, ハネカクシ科, アリヅカムシ亜科. 神奈川県昆虫談話会編 神奈川県昆虫誌 II, pp. 437-443.
亀澤洋・野村周平, 2012. 東京都から採集されたアリヅカムシの記録. 神奈川県虫報, (178): 1-19.
野村周平, 1990a. 長崎県のアリヅカムシ. こがねむし, (51): 55-64.
野村周平, 1995a. 宮崎県のアリヅカムシ — 特に東諸県地域のファウナに注目して —. 平嶋義宏編, 宮崎東諸県の生物 — その分類学・生態学的新知見 —, 秀巧社, 福岡: 1-16.
野村周平, 1995b. 宮崎県産土壌甲虫分布資料. 新筑紫の昆虫, (4): 25-35.
野村周平, 1995c. 長崎県のアリヅカムシ再説. こがねむし, (57): 29-35.
野村周平, 1996a. 佐賀県のアリヅカムシ. 佐賀県生物部会編, 佐賀県の生物, 音成印刷, 佐賀郡大和町, pp. 263-279.
野村周平, 1996b. 佐賀県産土壌甲虫分布資料. 佐賀の昆虫, (30): 721-727.
Nomura, S., 1996. Pselaphid fauna (Coleoptera, Pselaphidae) of the Abukuma Hills, eastern Honshu, Japan. *Memoirs of the National Science Museum, Tokyo*, (29): 113-124.
野村周平, 2002a. アリヅカムシ類. 栃木県自然環境基礎調査とちぎの土壌動物, pp. 263-278.
野村周平, 2002b. 佐賀県のアリヅカムシ再説. 佐賀の昆虫, (37): 535-549.
野村周平, 2004. 会津西街道のアリヅカムシ, コケムシ, ムクゲキノコムシ. *InsectTOHOKU*, (7): 2-6.
野村周平, 2010. 2009年夏佐賀県武雄市周辺で観察, 写真撮影した蝶とトンボ. 佐賀の昆虫, (46): 457-459.
野村周平・秋田勝己, 2007. 三重県で採集されたアリヅカムシ. ねじればね, (119): 8-15.
野村周平・福井修二, 2004. 島根県で採集されたアリヅカムシ第1報. すかしば, (52): 3-7.
野村周平・小池 寛, 1994. 新潟県産アリヅカムシ分布資料. 越佐昆虫同好会特別報告, 越佐昆虫同好会, 新潟市, (2): 123-137.
野村周平・松尾照男, 2001. 平戸島, 生月島と西彼杵半島のアリヅカムシ. こがねむし, (66): 1-6.
野村周平・三宅 武, 2008. 大分県内で採集したアリヅカムシ. 二豊のむし, (46): 30-41.
野村周平・三宅 武, 2009. 大分県内で採集したアリヅカムシ (第2報). 二豊のむし (47): 63-71.
野村周平・宮田隆輔・宮田俊江, 2006. 高知県のアリヅカムシ. げんせい, (81): 3-46.
野村周平・水野弘造, 2002. 京都府で採集されたアリヅカムシ. ねじればね, (101): 1-15.
野村周平・永井あつし, 1995. 宮崎県産アリヅカムシ科. タテハモドキ, 宮崎昆虫同好会, 宮崎市, (31): 19-27.
野村周平・南部敏明, 1996. アリの採集で得られた埼玉県のアリヅカムシ. 寄せ蛾記, (80): 2158-2160.
野村周平・降旗剛寛, 1998. 松本市およびその周辺で採集された土壌性甲虫. *New Entomologist*, 信州昆虫学会, 松本市, 47(1, 2): 27-32.
野村周平・櫻井俊一. 1998. 山形県のアリヅカムシ (鳥海山秋田県側を含む). 山形昆虫同好会誌, (27): 1-10.
野村周平・鈴木 功, 1993. 岐阜県内で採集されたアリヅカムシ. 啓蟄, 岐阜昆虫研究会, 岐阜市, 10(29): 31-33.
野村周平・田添京二, 1999. 福島県のアリヅカムシ (吾妻山山形県側を含む). ふくしまの虫, 福島市, (18): 47-54.
野村周平・渡辺 崇, 2009. 群馬県のアリヅカムシ相. 乱舞 (18): 33-39.
野村周平・山本栄治, 2000. 小田深山とその周辺のアリヅカムシ相 (コウチュウ目, ハネカクシ科, アリヅカムシ亜科).

愛媛県小田町編『小田深山の自然Ⅱ』, pp. 325–351.
 野村周平・横関秀行, 2007. 三重県のアリヅカムシ相. *ねじればね*, (121): 1–11.
 岡本 巖・野村周平, 1987. 広島県産アリヅカムシ科目録 (第1報). *広島虫の会会報*, 広島虫の会, 広島市, 26: 5–8.
 岡本 巖・野村周平, 1988. 広島県産アリヅカムシ科目録 (第2報). *広島虫の会会報*, 27: 45–47.
 降旗剛寛・野村周平, 2008. 長野県内で採集されたアリヅカムシ. *New Entomologist*, 信州昆虫学会, 松本市, 57(1, 2): 21–28.
 佐々木茂美, 1990. 大分県のアリヅカムシ(1). *二豊のむし*, (23): 29–31.
 Sawada, K., 1961. Neue Pselaphinen von Japan (3. Beitrag). *Entomological Review of Japan*, 12: 41–44.

Sharp, D., 1874. The Pselaphidae and Scydmaenidae of Japan. *Transaction of the entomological Society of London*, 1874: 105–130.
 Sharp, D., 1883. Revision of the Pselaphidae of Japan. *Transaction of the entomological Society of London*, 1883: 291–331.
 高羽正治・井村正行・西原省吾・中田勝之・高田兼太, 1998. *Coleoptera コウチュウ目*. 石川の自然環境シリーズ石川の昆虫, pp. 102–251.
 Waterhouse, C. O., 1882–90. *Aids to identification of insects*. E. W. Janson ed., London, 189 pls.
 山崎秀雄, 1999. 千葉県産の鞘翅目. 千葉県動物学会編 *千葉県動物誌*, 文一総合出版, pp. 634–718.

(2014年9月22日受領, 2014年12月9日受理)

【短報】愛媛県におけるオオマルケシゲンゴロウの初記録

オオマルケシゲンゴロウ *Hydrovatus bonvouloiri* Sharp, 1882 (図1) は, マルケシゲンゴロウ属に属する水生甲虫で, 本州西部, 四国 (香川県, 高知県), 九州, 南西諸島 (奄美大島を除く) に分布している (高知県, 2002; 森・北山, 2002). 四国からは, これまで香川県の小豆島および高知県から記録されていたが (高知県, 2002; 出嶋, 2007), 筆者は愛媛県初記録となる本種を採集したのでここに報告する.

15exs., 愛媛県伊予市森, 20. VII. 2014, 筆者採集・保管.

本種が確認されたのは, 抽水植物が繁茂した小さな沼地であった (図2). この沼地では, 植物の遷移が進行しており, 水際に堆積した植物残渣の中から多数の本種が得られた. 四国の瀬戸内海側では, 本種はこれまで小豆島以外からは発見されていなかったが, 今回の記録により本土部にも分布していることが確認された.

本種は, 環境省の第4次レッドリストで準絶滅危惧に選定されており (環境省自然環境局野生生物課, 2012), 四国で記録のある香川県と高知県においても, ともに準絶滅危惧に選定されている (高知県, 2002; 香川県, 2004). 筆者は, 「愛媛県版レッドデータブック」の改訂のため, 数年にわたり愛媛県内の広範囲で水生昆虫の調査を行ってきたが, これまで本種が確認されていなかったことから, 愛媛県内の分布も局地的である可能性が高い.

引用文献

出嶋利明, 2007. 香川県の水生食肉甲虫類. *香川生物*, (34): 83–96.
 香川県, 2004. 香川県レッドデータブック 香川県の希少野生生物. 417pp. 香川自然環境保全調査会.
 環境省自然環境局野生生物課, 2012. 報道発表資料 第4次レッドリストの公表について (お知らせ). (2014年7月30

日参照)
 高知県, 2002. 高知県レッドデータブック [動物編] —高知県の絶滅のおそれのある野生動物—. 470pp. 高知県文化環境部環境保全課.
 森 正人・北山 昭, 2002. 改訂版 図説 日本のゲンゴロウ. 231pp. 文一総合出版.

(渡部晃平 700-8617 岡山市北区津島京町3丁目1番21号 株式会社エイト日本技術開発)



図1. 愛媛県産オオマルケシゲンゴロウ.



図2. 本種の生息環境.